

隱
密
月
影
帖

月
の
巻



隱密月影帖

高木彬光



東都書房

隱密月影帖(上) 定価360円

昭和38年11月10日 第1刷発行

著者 高木彬光

© Akimitu Takagi 1963

発行者 西村俊成

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話(東京)(942)1111 振替(東京)72732

落丁本・乱丁本はおとりかえします

隱
密
月
影
帖

月
の
卷

目
次

命売りもの	七
怪盗出現	二五
渦紋	四三
千代田城	六一
闇の道	八〇
隠密の娘	九八
奇妙な武器	一一六

正雪の祕密

一三四

謎の系譜

一五二

黒い触手

一七〇

女の仮面

一八八

陥 穽

二〇六

百鬼夜行

二二三

謎の人々

二四二

装幀 玉井徳太郎
題字 柳 俊 一

八代將軍徳川吉宗と、当時の尾張藩主徳川宗春との間に激しい確執が存在したことは、歴史にかくれもない事実である。宗春治政の最盛期に、彼が突然、隠居を命ぜられ、死後も罪人同然にその墓に金網が張られていたという記録からだけでも、吉宗の彼に対する憎悪がなみなみならないものだったことは想像もつく。

それを後世の歴史家たちは、中村花街の開発などを一例とする宗春の大胆奔放な政策が、吉宗の神経を刺激したためだとしているが、私にはそうとは思えない。

さらに歴史をさかのばれば、吉宗が將軍位をついだ時の紀州尾張の政治的暗闘が存在している。その上に、いっそうの想像をたくましくすれば、いわゆる慶安の乱で知られる由井正雪の陰謀がある。

その詳細を記録で調べ、ある推理を進めて行くならば、紀州徳川家が代々將軍位に対して抱いていた執念は、なみたいていのものになかったことも想像できるのである。

そして、また、吉宗、宗春の間には、後世に『尾張合戦』といわ

れた微妙な隠密合戦が展開されていたことも、おそらく事実と思われる。ただ、隠微そのものといいたいような隠密、逆隠密の行動は、とうぜん記録のかけに埋もれて、後世われわれの想像をいたずらに刺戟するばかりなのだ……。

その刺戟が、私にこの物語を生み出させたのである。

事件の中核となっているのは、このような歴史的事実だが、私はその基礎の上に、奔放な空想を進めて見た。武士であって武士といえない隠密たちが、苛酷な大使命をおわされたとき、どれほど悲惨な道をたどって行くことか、それも私のこの物語の一つのねらいだったことは間違いないが、私はさらにその上に、一つのロマンの花を咲かせて見たかったのだ……。

この物語は、徳川吉宗が將軍位についてほぼ一年の後、徳川宗春が、まだ万五郎通春という名で、部屋住みの生活が続けていたころ、江戸を舞台として展開される。後年の隠密合戦は、このころから早くも始まっていたのだ……。

命売りもの

1

大川の水面を白い腹でかすめて、つばめが二羽、また三羽、稲妻のように右に折れ左に折れて、両国橋の上まで舞い上って行った。

橋の上を往来する人々の顔にも、明るい喜色がみなぎっている。緑の香をいっぱいのにせて、肌にくれてくるそよ風も、女の吐息のようになまめかしい。

「いい陽気になったものだ」

橋の上で足をとめ、ゆるやかな水の流れを見つめていた深編笠、無紋の羽織の長身の侍がつぶやいた。

「御意」

影の形にそうように、そのそばに従っていた深編笠の小柄の侍が答えた。

こういう短いやりとりを聞いただけでも、誰か大身の侍

が、身分を包み、微行して下情でも視察に歩いているところだと推測できる。いや、五、六間むこうの橋詰のあたりには、いかにも腕におぼえのありそうな若侍が四人、立ちどまって、見えがくれの護衛をつづけているのだった。

「大作、ここは屋敷ではないぞ。そのような左様しからば流の言葉は、使うなど申しておいたのに」

深編笠の下からは、かすかな笑いがもれていた。その言葉の響きなり、笑い声の調子から判断したところでは、まだ二十代の青年らしく思われる。

「でも、若殿」

「なお悪い。そう呼ばれては、いよいよもって窮屈だ」

「さようでございましたなあ。いや、十分承知しているつもりでも、手前のような武骨者には、いったんしみこんだ癖がなかなかぬけません」

家来のほうも苦笑していた。

「そのくせを作るから悪いのだな。水は方円の器に従うというが、あのようにいかなる周囲の変化にも順応して見せるのが、人間の一つの理想ではないのか」

年に似あわず、この述懐のような言葉には何かの深い意味がひそんでいるようだった。

「万五郎様の御胸中はお察しいたしております」

大作は、ちよつと鼻につまったような声で、

「これほどの御抱負、御才能をお持ちの万五郎様が、今度

の問題では……」

「諏訪、いうな」

万五郎は鋭く後をふりかえった。

「天下御政道の批判はもつてのほか、ましてこのような往來では、どんなところで、どんな人間が聞き耳たてているかも知れぬぞ。わしは尾張の次男坊、徳川万五郎通春であればいいのだ。そして自由を楽しめばよい。それ以上の地位にはつきたいとも思わないのだ」

ちょうど橋の上に人通りの絶えたのを見きわめてから、

万五郎はさとうすようにいった。

「はあ、そのことは重々心得ておるつもりでございます
が、つい愚痴も……」

「それも申すな。さあ、参るぞ」

万五郎はゆつくりと歩き出したが、ちょうど橋を渡り切ろうとしたあたりで足をとめて、

「大作、あれは何かな？」

と、橋のたもとの数間むこうに円陣をつくっている人々を指さした。

「どうせ、香具屋、芸人のたぐいではございせんか。このごろでは、居合抜を使うと見せて、齒磨粉などを売りつける侍くずれの商売人などもおるとか申します」

「面白い、行ってみよう」

また、この若殿の好奇心がさわぎ出したかと、諏訪大作

は編笠の下で苦笑していた。

すべて、新しいこと、変ったこととなると、追求せずにおさまらないのが、万五郎の性格なのだ。彼等、そばにつかえる侍たちは、この癖のおかげでどれだけ悩まされているか知れない。

二人は、円陣をかきわけて、前に出たが、その中に展開されていた光景は、およそ変ったものだった。

柳の太木を後にして、円座の上に、一人の若い浪人が坐っている。年ごろは二十三、四か、女のようにやさしく、しかも何となく、虚無の影を宿した顔だちなのだ。

街頭禪とかいう座禪の一種もあるが、どうもそうでもないらしい。

「大作、あれを見ろ」

万五郎はその浪人の坐っている頭の上のあたりを指さした。柳の幹に、白紙が一枚、小柄でとめられて、その上には墨黒々と、

「命売物 三日月新之助」

と書いてある。

大作が息をのんだとき、旗本らしい侍が円陣の内側へ一歩進み出た。

「三日月とやら、変った貼札を出しているが、ほんとうに自分の命を売るつもりなのか」

三日月新之助は、物憂げに、いままで閉じていた両眼を

開いた。

「他人の命は拙者には売れぬ。自分のものだから売れるのだ」

どっと笑い声がまわりに起った。この侍も自分が笑われていると思つたのか、ぐっと左右を見まわすと、

「どうしてそんな氣をおこしたのだ。命は一つしかないぞ」

「知っている」

「一つしかない命をなぜ捨てる氣になつた」

「生きてゐるのに飽いたからだ」

「いよいよもつて變つた男だ。なぜ、そのようにこの世に愛想をつかしたのだ？」

「理由はあまりいたくない。強いてというなら、惚れた女に死なれたためと申そうか」

また、笑いがおこつたが、新之助の唇はかすかにゆるんだだけだつた。

「氣の小さいやつだな。三千世界に星の数ほど女はおるのに、一人や二人死なれたぐらいで世をはかなむとは、武士として、まことに見下げはてた心がけだな」

「それは、そつちの知つたことではない。あまり売物にけちをつけるのはよしてもらおう」

「いや、場合によっては、拙者が買つてもいいと思うから申しておるのだ。そんなにこの世に未練がないなら、いっ

そ拙者が買ひとつて、新刀のためし斬りに使つてもいいと思ふのだが、いったい値はいかほどだ」

新之助は、唇のあたりに氷のような笑いを浮べ、吐き出すように答えた。

「おなじ命を売るにしても、そのような使われ方はまづびらぐめんだ。値は千両、びた一文も負けられぬ」

十両の金を盗めば、首が飛ぶということになっているのに、いかに命を売りに出すといつても、千両とは法外といつていいだろう。

まわりの人々が、いっせいに、嘲けるような笑いをもらったのも無理のないことだつた。

この旗本も、この辺が切り上げ時と見たらしい。「こいつ、氣違いと見きわめたわ。ええ、これ以上話してみてもこちらが馬鹿といわれるだけだ」

吐き出すようにいいすてると、人ごみをかきわけて外へ出て行つた。人垣もちらほらと散りはじめたが、万五郎はまだ、足が釘づけになつたようにその場を動かなかった。

「ええ、どけ、どけ！」

そのとき、反対側からとびこんで来たのは一人の同心と目明し二人だつた。十手をぐつとつきつけて、

「其方はなぜこのように人さわがせなまねをするのだ？」

「べつにさわがせようとは思っていない。こちらはただ、黙つて坐つてゐるだけだ」

新之助は、動揺した様子もなく淡々と答えた。

「何をいうのだ。命を売るといふような珍妙な貼札を出しておいて、人さわがせでないというのか」

「早くここから立ち去ればよし。さもなくば番所へひつたてて、百日の入牢を命じるぞ」

目明したちも、頭に血の上ったような声でまくしたてた。

「はて、大岡越前守どのは、近來まれな名奉行と聞いたが、侍が命を売ってはならぬというようなおふれでも出されたのかな」

捨てぜりふのようにつぶやきながら、新之助は着物の埃をはらって立ち上った。

その瞬間、何を見たのか、

「そこどけ！」

という鋭い叫びをあげながら、人一人いない空間に、新之助の太刀が一閃した。

「何をする！」

「若君！」

同心も目明しも飛びのいて十手をかまえ直し、大作は万五郎をかばって、刀の柄に手をかけた。誰が見ても、このときの新之助の行動は、狂人のしわざとしか思えなかったのだ。

しかし、そのとき、新之助は懷紙で刀をぬぐい、ぱちり

と鞘におさめていた。

「それを見ろ」

その指先の示した地面の上を見て、大作は思わず固唾かたつばをのみこんだ。同心も目明したちもさすがに顔色をかえていた。

そこには、つばめが一羽、みごとに刃にかけられて、血まみれになって落ちていたのだった。

「すごい……すごいお腕前でござるな」

同心もかすれ声でいうのである。

「これぐらいは大したこともない」

新之助は、相かわらず淡々たる調子で、

「これだけの腕の持主の命が千両で買えるなら、安い買物だと思いがな。わしはどうやら生れて来る時をあやまっていたようだ。もしこれが戦国時代なら、雑作なく、一国一城の主にもなれるのに」

と自嘲か自負か分らない言葉をもらした。

万五郎はそのとき、何を思ったか、くるりと身をひるがえして、急ぎ足で歩き出した。

大作もあわててそのあとを追ったが、万五郎は小半丁ほど向うで立ちどまると、

「諏訪、あの浪人はすごい腕だな。尾州藩中あれば腕の立つ者は一人でもおろうかな」

と感にたえたような声でいった。

「あのつばめを切り落したのがまことといたしますれば、おそらく彼にまざる者は一人もおりますまい」

「本当に切り落したのではないのか」

「大道芸人のたぐいには、手品をうまく使う者があると申します、居合の一閃に人の眼をうばい、その間に、人の環の中にまじっておりました仲間の者が、かねて用意していたつばめの死体を、ぱっとその場に投げ出すようなことも不可能とは申せません」

「手品か？ しかし、最初につばめを捕えるということがそもそも難事ではないか」

「しかし、たとえばかすみ網などに、つばめがあやまってかかることは、決してないでもございません」

万五郎はちよつと黙りこんだ。何かを心に決しかねて、思案しているようだった。

「万五郎様、あの浪人をお召しかかえなさるおつもりではございますまいな」

大作はたまりかねていい出した。

「場合によっては、考えてもよいと思っているが……」

「それだけはお見あわせ下さいませ」

「なぜだ？」

「あの男が、ほんとうに剣の名手か、それともいかさまの手品使いかべつといたしましても、彼の身には、奇妙に暗い影がまつわりついているように見えます。鬼気、殺気

とてもいいたいようないまわしいもの、そのような暗い影の持主を、おそば近くにおめしかかえなさることは、決しておためになりますまい。御運の妨げでございますぞ」

「その影のようなものは、わしにも感じられたが、しかし……」

万五郎はまだ、この浪人に対する何かの未練をたちきれないようだった。

「大作、誰かほかの者に、彼の跡を追わせて見るがよい」

「は……」

「外村与四郎がよろうな。彼はいったん食いついたら、雷が落ちても離れる男でない。途中で声をかけたりなどせず、その住居までつけて行って、生国、旧藩、日ごろの行状などをのこらず調べさせい。わかったな」

「かしこまりました」

万五郎にここまでいいきられては、どんなに反対してもむだだということは、大作もよく知りぬいていた。

大作は小走りに、四人の護衛のほうへ近づくと、外村与四郎をえらんで、いまの命令をくりかえした。

「わかったな。あの浪人だぞ」

「しかし、先手を打たれたようでございますな。女があとをつけております」

大作もふりかえってぎくりとした。円座の入っているらしい風呂敷包をかかえて川べりを歩いて行く新之助の背後

には、櫛巻のあだつばい女が続いていたのだった。

2

「ねえ、三日月さんとやら、ちょっと待って下さいな」

女の声を後から聞いて、新之助はふりかえった。氷のように冷たく光る両眼は、このあだつばい女の姿を見ても、何の反応も示さないようだった。

「何か用かな」

「いまの居合を拝見して、どうしても、あなたとお話がしたくなつたんですよ。わたしの家はすぐそこだけど、ちょっとお寄りになって下さらない？」

白歯をちらりと見せて、この女は色つばい眼でさそいかけた。

「うむ……」

「どうせ、お急ぎの御用はないんでしょう。あんな所に坐つてらっしゃるくらいだから。千両のお命の買手は、そうかんたんには見つかりませんよ」

「うむ……」

何を考えているか気のない返事だった。その物憂げな態度物腰は、いまあれだけの腕の冴えを見せた人間と同一人かと思われるくらいだった。

「物は相談ということもござんしょう。ごらんのように、わたしはしがない女ですけれど、場合によっちゃ、あなた

のお命の買手を見つけてあげられるかも知れませんよ」

「それほど顔がひろいのか。ところでそなたの名前は？」

「まあ、これは、わたしとしたことが、申しおくれまして」

ちよつと小腰をかがめてしなを作ると、

「わたしはお紺と申します。どうぞ、お見知りおき下さいまし」

「お紺か、いい名前だな」

新之助の声には初めてやわらかな感情がともなつてきた。お紺という名の女には、なにかの思い出があるのかも知れない。

「まあ、とにかく立ち話も何でござんすから、家までおいで下さいまし。お酒はお好きなのでございましょう」

「好きは好きだが、なにもそなたから御馳走になるわけはないな」

「まあ、よろしいじゃございせんか。お近づきのおしるしだとお考えになつて」

「それでは御馳走になろうかな。ただ、酔わせてこっちの売物を値切ろうとしても、それはだめだぞ」

「ほほほ、わたしも女ながら江戸っ子のつもりでございます。そんなみみっちいまねはいたしませんよ」

「うん」

新之助はまたもとの虚無的な表情にかえて、お紺と肩をならべて歩き出した。

「そなた、生れは江戸かな？」

「ええ、神田明神下の生れでござんすが、あなたは？」

「生れた場所はどこか知らぬ。唐や天竺の生れではないことだけは分かっているが」

「御両親はおられないのでござんすね」

「顔さえ見たことがない。親でも生きていたならば、まさか命を売物に出そうとは思わないが」

新之助は、自嘲のようにいって、かすかな溜息をもらしていた。

お紺の住居は、そこから二、三丁先の横町へ入ったしもた屋だった。

黒板塀に見越の松とかまえは、おきまりの妾宅作りだが、家の中にも、年よりの女中と三毛猫しかいない。

「まあ、何もございませんが、ありあわせのお肴でおひとつ」

ちょっと台所へ行っていたお紺はすぐに黒塗りのお膳に銚子を一本と、干物の皿をのせてもどって来た。

「それでは一ついただくかな」

新之助はべつに悪びれもせず杯をとりあげた。酒は好きだといっていたが、酒量も相当なものらしい。たちまち、三本の銚子が空になったが、顔にはぜんぜん色も出な

い。

「三日月というお名前は、御本名ではないのでござんしょうね」

新しい銚子で酌をしながら、お紺は聞いた。

「はて、どうしてそのようなことを聞く？」

「あなたをじつと拝見しておりますと、ただの浪人とは思えませんから。しかるべき素性、御身分のお方が、世をしのんで、街へ出られたのかと思ひまして」

お紺の両眼はきらりと光った。新之助の表情の動きから、心の中まで見透そうとしているようだった。

「それはそなたの買いかぶりだな。どうも男の人相を見るのは得手ではなさそうだ」

新之助はかすかに虚無的な笑いをもらして、

「三日月という名前にいわれがないとはいわないが、いって、実は本名何の某と名のするような名前も持ちあわせてはいない」

「それで、その剣法は何流でございます？」

「べつに正式に師について学んだ剣ではないから、何流と聞かれても困るな。強いていうなら一流一人で、三日月流とでも申そうか」

「三日月のように鋭い剣法だとおっしゃるのでござんすね」

お紺は手を鳴らして、あらわれた女中に、新しい銚子を

持つて来るようにいつけると、

「ところで、千両の金を積まれても、命がなくなつてしまえば、それっきりで、金の使いようもありますまいが、そのお金はいったい何にお使いなさるおつもりでござんすか」

「命を売ったところで、必ずしも死ぬとはきまつていないだろう」

「といいますと？」

「たしかに千両もらつて、新刀のためし斬りに使われたり、毒のきき目をためされたりするのは、それまでだろうが、こっちの売り方はこんなことだ。千両で命が売れたなら、その買主のために、命をかけ、この剣を握つて阿修羅の動きを見て見せる。そのためには、たとえ命を捨てても悔いはないというわけだ。これなら、使い方一つでは、買主のほうも、千両の元手をかけても損がない場合もあるだろう。また、拙者のほうも、命の代金をうまく使えるかも知れないな」

奇妙な論法には違いないが、それなりに筋も通つているといっていいだろう。

お紺も眼をまるくしながら、何度かうなずいていたが、何を思ったのか、

「それで買手のほうには、べつに御注文はないんでござんすか。たとえば善悪どちらでも」

とたずねてきた。

「さあ、その辺はどういうものか」

新之助は唇のはじに冷たい笑いをたたえて、

「約束がまとまるまでは、金は買手のものだが、命はこちらのものだ。たとえば、一時に二軒から話があつたようなとき、どっちに売るかはこっちの勝手だ。まさか、両方どちらにも、半殺しにされてもいいと約束するわけには行かないだろう」

「右半身はむこうのもの、左半身はこっちのものと分けるわけにも行きませんしね」

お紺は笑いながら、相鎚をうった。

「いかにこちらが酔狂でも、万人の眼に悪事とわかることには加担したくはない。ただ、物事は立場によつて、黒白の差がわかれることもある。一方では自分が善、正義を行なつていと思つてゐるのに、それと対立する側からは、極悪非道の見本だと思われていることもあるう」

「たとえば、お家騒動のような場合でござんすねえ」

「まあ、そういうようなところだな。その場合にはしかたがない。口のかかったほうに命を売るまでだな」

「そのあげくが、敵の刀で斬り殺されるわけではなく、たとえば打首しばり首のようなお仕置きにあつてもいいんでござんすか？」

「何も好んで、そんな目にあいたいとは思わぬが、そうい